



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雜報. 地球 1932, 18(2): 150-158

ISSUE DATE:

1932-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184065>

RIGHT:

しき施設例へば屋島のケープルの如き、學術上著しい建造物例へば別府の地球物理觀測所の如きものが描かれてないのは瑕瑾であつて、かゝる地方的な人目を惹く人文地理的のものも地形描寫を損なはざる程度に於て描出することは中等程度の教課用としては必要だと思ふ。次輯にはかゝる要意あるものを公にされんことは一般地理愛好家の希望だと云ひ得る。(中村)

### ○石炭埋藏量調査概要

商工省鑛山局  
昭和七年三月

非賣品

本書は昭和四年度より昭和六年度に至る三ヶ年間に亘り調査されたる概要を輯録したるものである。全篇を二章に分ち、第一章には炭田の地質、炭種、用途、埋藏、産額及需給、亞炭鐵業等を記し、第二章には各論として北海道、本州、九州の諸炭田の地質及炭量等を記載する。炭量は本邦内地に於て既探掘十億二千百萬噸、不可探掘十億五千萬噸、未探掘百六十六億九千百萬噸と計算する。未探掘炭量中、現存五十九億六千萬噸、推定四十億四千六百萬噸、豫想六十六億八千五百萬噸であるといふ。現存炭量中では無煙炭及燐石七億二千萬噸、瀝青炭百五十五億噸、亞炭四億七千萬噸と推定されて居る。以上は理論炭量であつて現在の技術によつて實收し得べき炭量は内地合計にて略六十五億噸とすべきか。而して炭量計算の基礎は厚さ一尺以上の炭層は大體疏水準下四千尺迄探掘し得るものとして計算されてある。日本の如き地質の國で

四千尺の深部まで全炭坑を探掘するといふことは經濟的には困難な場合が起るかもしれぬ。(上治)

### ○地形圖の讀方と其利用

鈴木翁吉著 古今書院發行  
定價一圓八十錢

著者は陸地測量部に於て地形測量をやつてゐる篤學の士である。測量部の地圖のプロゼクシヨン、圖式、水平曲線、地性線、地形學的地形、火山等の問題をすべて地圖によつて之を理解せしむることをつとめてある、最後に説明圖式や圖上の各種測定と經緯線長一覽表がつけてある、地形學を學ばんとする人には誠に簡明にして要を得た好著であると信じ一般に之を推薦したい。(藤田)

### ○滿蒙を正視して

大連中等學校滿蒙研究會 非賣品

大連の中等學校に奉職する十四の地歴の教員方の努力の結晶である。滿蒙事變を世界人に向つて正解さすに先つて自分たちが滿蒙を正解すべきであるとして滿蒙の重要性や、滿洲事變の原因や經過をのべてある。(藤川)

### 雜報

#### ○滿洲錦州市街

(圖版第二版)  
解説

遼西の大市場である錦州

(錦縣)は遼河大平原から分れた小凌河中流の東西に延びた盆地の中にある。人口七萬六千。滿洲事變の初期から一層有名になつて中國の歐洲使節が此の大邑の存在を知らなかつたと

いふので愈日本では名高くなつた處である。第二版は市中の高層の屋上から北を展望したもので、最も著しいのは風なきに崩れゆく八角十三層の白塔であり、塔後には輪奐莊大な大廣濟寺（名大佛寺）が見え、右手には市の中央にある樓門が聳えてゐる。市街の外廓は船形を呈し内に平層根の家が密集してゐる。遠く見えるのは玢岩類から成る蒙古高原の縁邊である。

## ○撫順のオイルシェール工業

世界石油の爭奪戦は奈邊まで進展するや測り知れないがあらゆる知と技とを以て石油の收得を計りつゝある世界の現状である。我滿鐵撫順のオイル・シェール事業も此石油戦の一反映に他ならぬ。此工場は昭和三年四月建設に着手し四年十一月竣工五年五月より初めて重油及粗蠟を産出したのである。此と共にやはり滿鐵經營の周防徳山の日本製蠟會社は昭和五年十一月初めて精蠟の操作をなしたので初めて同工業が我國に於て完成したわけである。

撫順炭田は人の知る通り炭層直上に厚き四百五十呎の頁岩層があり其埋藏量は約五十五億屯に達すると云ふ。而して其頁岩の含油量は平均六％で上層より二〇〇呎迄は一〇％、以下百呎迄は六％、それ以下百呎は二％である。然し工業原料として採算可能のものは露天堀區域内の五億屯中六％以上の含油量を有する約二億屯である。而して此作業は毎年八百屯の油母頁岩を廿五ヶ年得られるから原料としては豊富と言は

ねばならぬ。

今工場操作の概要を述べると先づ油母頁岩を乾溜爐に投じて二〇〇度の熱で乾溜し、發生瓦斯體を冷却筒に導く。すると油分は霧狀に凝結し原油槽に入り残りの瓦斯體はアンモニア吸收到に通過し硫酸を注ぎかけ硫酸アンモニア液を造り殘餘の瓦斯は循環樣式に加熱爐に送られ乾溜筒の加熱料となる。原油槽の原油は蒸溜筒を通じ重油と粗蠟とに分ち重油は冷却器を経て重油槽に注ぎそのまま海軍に供給され、粗蠟はポット・スチルに導きコークスに分離し結晶器壓搾器を経て粗蠟槽に注ぎ徳山の精蠟會社に送られる。而して頁岩の分析成績は水分三・五、揮發分一七・六、固定炭素四・一、灰分七四・八、窒素〇・五二で此窒素は全く副産物にして、頁岩一屯につき約三十封度の硫酸となり原油生産費を低減し本工業を有利に導いてゐる。

撫順の本工場は五十噸爐八基と附屬裝置を有し一ヶ年百三十六萬餘屯の頁岩を處理し粗油七萬屯餘、硫酸一萬三千屯、粗蠟一萬四千屯、焦炭五千屯を採集し粗蠟は白蠟七千屯と重油六千屯を得、これにより同工場は徳山日本精蠟と共に年額五萬九千屯の重油を得る事が出来る。撫順露天堀作業により掘棄てられた一ヶ年間の頁岩八百萬屯を全部かくの如き方法裝置によつて處理する事が出来るならば重油を年三十二萬屯製出する事が出来る。副産的工業の價值大なりと言はねばならぬ。此が若し實現する時が来るならば世界石油戦場に於て

一步帝國の地位を進める事が出来るわけである。(石油時報 KY)

### ○インドの鐵鑛

インドは英領土内第二の鐵鑛產出國で一九二九年迄は逐年其產出が増加した、但し同年度米國の鐵鑛產出七千萬噸、佛國五千萬噸に比すれば印度の產出約二百四十二萬九千噸は僅少である、けれども印度の鐵鑛埋藏量は米國の總埋藏量の四分三以上であるといふから輕視できない恐らく將來に於て鐵鑛產出國として世界有數の國となるであらう一九三〇年の產出は二割三分八厘即五十七萬八千九百三十噸を減産したが世界不況の打撃である、印度鐵鑛の主要地はカルカッタの西南一八〇哩シングハム Singham 地方でペンゴール、ナグプール鐵道の便がある、この沿線には銅の產出も多いがシングハムでは總產出量百九萬九千四百三十五噸に達したタ製鐵所のノアムデン鑛山から約四十萬噸を出し、ベンゴール製鐵所のパンシラ・アジタ及マクレラン鑛山から二十五萬トン、印度製鐵所のグア鑛山から四十五萬トンを出した。

ビルマの方面にも鐵鑛があるので、タタ製鐵所が採掘してゐる。ペンゴール製鐵會社は銑鐵を産し年に十九萬八千トンそれから鐵道枕木、坐鐵、鐵管等の多くを産しインド鐵鋼會社は三十五萬噸の銑を産しマイソール製鐵所は二三萬噸の銑を出してゐる、これらのインド銑鐵の主たる需要國は日本であつて、同國總輸出量の五割乃至四割を輸入してゐる、その

餘は英國及米國に仕向けられてゐる。

### ○鉛筆用樹種

日本で一ヶ年三百萬圓位の鉛筆の消費がある、そのうち百萬圓程のものは軸用材の費用であるが、現在の鉛筆軸材は八割まで北米カリフォルニア産のインセン・シーダーでそのつぎがレッド・シーダ及柏楨である、更に下つてアラギヤ桂が使用される、國產愛用の聲が高くなるにつれて皮肉にもその材料は全部輸入品に待つことになつた、四五年前までは北海産のアラギが國產で全盛であつたが今日では殆どインセン・シーダーにかはつてしまつた、この材が横濱に來て六本取のもの四十八枚(即一グロス)が三十五錢、アラギは二十四五錢である、しかしアラ、ギは硬い上に軸になつてから曲る、インセンの方は軸が軟くどんな小學校一年生の切れないナイフでも容易に割られる、製造上歩取りが宜く材料がガツチリしてゐる、白太、筋、逆目がない、アラ、ギは生木を一度焼かなければならん、焼いただけでは乾燥しすぎて居るから鉛筆に仕上げてから天日にさらして置くと其間に曲る、故に焼いてから一ヶ月乃至二ヶ月は貯へて置かねばならぬ、面倒であるから十錢位高くともインセンがよい、猶アラ、ギは北海道で沙流川方面の產が段々減少してきた、質もわるくなつたのでいよゝインセンが勝利をしめてきた。但し米國での一等品は獨逸へ輸出し、二等品が日本にくる。しかし米國でもこのインセンの樹林が減少してきたから、質がわるくなる一方である。インセン

の輸入高は年に十萬ゲロス、柏横の方は一萬五千ゲロス、今日では何とかしてインセンス・シーダーの代用品を見つける必要があるといふことである。但しそれでも近年は國産鉛筆が殆ど輸入を杜絶し、製圖用の高級鉛筆、寫眞修整用鉛筆、コッビーペンシル、フアンシーペンシル、醫者の顯微鏡に用ふる鉛筆等高級品の輸入のみとなつて、獨逸の安物も國産品のために驅逐されてしまつた。猶昭和七年四月ロンドン駐在商務官の報告によれば、本邦製各種鉛筆は英國へも輸出されて一九三〇年度三、四九八磅に達した、同年英國への鉛筆輸入額二〇六、二〇一磅に比すれば勿論御話にならぬ、主として獨逸ババリヤ製品が賣れてゆき、日本品はアフリカの如き未開地方へ轉賣する爲めに輸入される、しかしウルウオーズの六片店には本邦製の紙製文具類が賣れてゆくので鉛筆も日本品が之に伴出するのである。英國のみでなく日本鉛筆の輸出せらるゝ國は多い世界は廣い。

### ○中部支那と日本との貿易

大藏省の貿易統計によれば本邦の對中部支那貿易額は昭和四年二億七千二百萬圓、昭和五年一億九千三百萬圓、昭和六年一億三千六百萬圓にして我對支全貿易額に對する割合は、香港を除外すれば二割九分乃至三割二分、香港を包含すれば二割七分乃至三割である。此外朝鮮及臺灣兩總督府の貿易統計に依ればこの二地方から一千萬圓及千三百萬圓を輸出する。之を昭和四年の貿易に見ると本邦より中部支那への輸出一億八千九百萬圓、中部支那

より日本へ輸入八千三百萬圓で差引一億圓以上の輸出超過である。但し本邦の對滿貿易は之に反して常に輸入超過である。

最近三年間の貿易は年々減退し四年よりも五年は二割九分減、六年は五年よりも更に二割九分減となつてゐる、主として世界不況の結果と銀價暴落と支那の内亂及湖北、湖南、江西の共產黨の跋扈、揚子江の洪水等の原因に災されたのである。それと同時に萬寶山事件に對する排日貨は、中部支那に最も猛烈であつたから、六年度は右の通りに著減したのである。輸入品は日本の綿織物八千萬圓を最とし精糖の千四百萬圓、石炭の千二百萬圓、衣類及附屬品の千百萬圓、紙類の千百萬圓、水産物の六百萬圓之につき、機械綿織糸、絹織物、木材等すべて中部支那に無いものである。又本邦への輸入品は實棉又は繰綿の千百萬圓、菜子及芥子の千百萬圓、鐵礦八百萬圓、油粕の七百八十萬圓、苧麻類の七百萬圓、麩の六百萬圓、之について漆、皮、豆、胡麻子、獸毛等いづれも原料品である、排日と抗日は兩國の災であるといふことが、之をみるとよくわかる、上海事變による邦商の損害は從來一ヶ月取引約四千四百十八萬五千圓が杜絶したのである、支那側の損害も一億數千萬圓に達したといふ市社會局の報告である。戦争といふことはかうした點からは好ましいものではない。

### ○臺灣の樟腦

現在樟腦はセルロイドの原料と醫藥、龍腦の原料、インドで燒香用や爆發物製造原料として用途ひろく、世界で凡そ一年千七、八百萬ポンドを消費する、その内

八〇％はセルロイドである、米國はこの中四〇％を消費する供給の方では獨、佛、伊でターペンタイン油を原料として合成樟腦をつくる、ドイツ最も多く年七百萬ポンドに達する、其他は合計で百萬ポンドにすぎない、そこでこのつた二千萬ポンドの天然樟腦の需要がある、日本、臺灣、南支那から産する、中にも臺灣では樟科植物十一屬六十四種に達する中で「クスノキ屬」の老木からとる、この老木は猶數十年の製腦に堪へる見込がある。總督府は二三十年來盛に樟樹を殖林したから、原料は永久にある、山製樟腦を集め、專賣局工場（臺北）で之を精製し、「乙種樟腦」として分賣する。年約七百萬

ポンド、内四百萬ポンドは三井物産の手で輸出、残り三百萬ポンドは國內の精製原料やセルロイド原料に供給される。副産物たる種々の油類は三井物産と神戸香料會社から内外に販賣する、その副産物は一、白油（芳香油）でビネン、カムフェン、チネオール、テルペンを含み、ターペンタイン代用、石鹼、賦香料とする、二、赤油はサフロールで石鹼香料其他に用ひ、三、芳油は淡黄色で主としてリナロール八〇％をふくむ、四、藍色油はセスキテルペンを含む防臭、殺菌劑の原料其他醫藥製造原料とする。

# ○享保以後の地理關係出版書目

大阪（三）

書名

作者

板元

出願

南海道名所志 一册  
以前「國花萬葉記」と題せしものゝ内を抜摺にし改題板行申出

鹽屋三郎兵衛  
右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行  
安永八年十二月

西國順禮道中繪圖本 一册 右改題板行申出

河内屋喜兵衛  
右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行  
安永九年二月

四民通用 天文即鑑 折本 一册  
以前「懷中天文臺」と題せしを此度改題板行申出

富士屋長兵衛  
右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行  
安永九年二月

二水合流圖 折本 一册  
以前「川繪圖」と題せしを此度改題板行申出

富士屋長兵衛  
右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行  
安永九年二月

改正日本道中行程記 一册

吉文字屋市兵衛（木挽町中之町）右同人

安永九年十月  
安永九年十月廿二日

大和廻道法繪圖 一枚摺

藤本庄司(和州新ノ口村)

鹽屋平助(南久太郎町六丁目) 天明二年四月廿八日

大坂買物手引草 兩面一枚摺

陰山白緣齋(今橋二丁目)

鹽屋三郎兵衛(今橋二丁目) 天明二年十一月八日

名所浪華の市 兩面一枚摺

陰山白緣齋(今橋二丁目)

鹽屋三郎兵衛(今橋二丁目) 天明二年十一月八日

大坂四季の志をり 兩面一枚摺

陰山白緣齋(今橋二丁目)

鹽屋三郎兵衛(今橋二丁目) 天明二年十二月八日

重編日本輿地全圖 一冊

長久保源五兵衛(常州水戸)

藤屋彌兵衛(高麗橋一丁目) 天明三年十一月八日

大坂買物手引草 半紙三ツ切本 一冊  
舊板は折本なりしを仕立を換へ板行申出

曾谷忠助(平野町二丁目)

河内屋喜兵衛 天明五年五月

大坂指掌之圖 兩面一枚摺

曾谷忠助(平野町二丁目)

播磨屋九兵衛(高麗橋一丁目) 寛政五年八月廿八日

諸國道中案見圖 折本 一冊

淺野列重

藤屋彌兵衛(高麗橋一丁目) 寛政六年五月廿七日

四國通路圖 一枚摺

山口周助(順慶町三丁目)

寛政六年十月廿八日

東海道名跡圖會 一冊

以前「目玉鉾」と題せしもの、内東海道の部分、を抜摺にし、此度改題發行願出

吉文字屋市左衛門(木挽町中之町)

寛政七年八月廿四日

日本風土記 一冊

以前「日本事跡考」と題せしもの、一部を此度改題發行申出

平瀬輔世

河内屋多助 寛政七年九月三日

日本名産圖會 五冊 丁數九十八丁

平瀬輔世 丁數百五十一丁

千草屋平兵衛(江戸堀三丁目) 寛政七年十一月

伊勢參宮名所圖會 三冊 丁數百五十一丁

都關月(平野町二丁目)

鹽屋忠兵衛(北久太郎町五丁目) 寛政七年十二月

増補日本汐路之記 一冊 再刻發行申出

和蘭新譯地球全圖 折本 一冊

國界重鐫日本輿地路程全圖 一冊 書翰色摺

伊勢參宮名所圖會 五冊 同附錄 一冊  
以前「伊勢參宮名所圖會」は二冊物なり  
しが、増補訂正を加へ本文五冊附錄一冊  
に改め新に發行願出

三郷大坂細覽圖 一枚摺 書翰摺

堺細見繪圖 折本 一冊

畫本異國一覽 五冊

浪速上古圖說 拜圖四枚 一冊 丁數二十七丁

肥前風土記 一冊 丁數十六丁

諸國獨案内 折本 一冊

津國八十弘法大師巡禮記 一冊  
八ヶ所

豊後風土記 一冊

東海道中案見圖 折本 一冊

長久保赤水(水戸)

長久保赤水(水戸)

部關月(高麗橋三丁目)

赤善應(高麗橋一丁目)

中井藍江(尼崎町二丁目)

岡田玉山

中村直躬

宇治五十槻(雪踏屋町)

増田甚兵衛

新板發行申出  
鹽屋三郎兵衛

宇治五十槻  
(勢州荒木田神主)

西守貞丈(岩田町)

河内屋惣兵衛  
右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行

寛政八年五月

藤屋彌兵衛(高麗橋一丁目)

寛政八年十一月十八日

藤屋彌兵衛(高麗橋一丁目)

寛政九年五月

鹽屋忠兵衛(北久太郎町五丁目)

寛政九年五月廿一日

播磨屋九兵衛(高麗橋一丁目)

寛政九年十二月五日

柏原屋嘉兵衛(博勞町)

寛政十年六月十六日

藤屋彌兵衛

寛政十年八月七日

柏原屋佐兵衛(順慶町五丁目)

寛政十年十一月十六日

河内屋喜兵衛  
(北久太郎町五丁目)

寛政十年十二月十七日

吉文字屋源十郎  
(木挽町中之町)

寛政十二年二月

右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行

寛政十二年四月十五日

河内屋喜兵衛  
(北久太郎町五丁目)

寛政十二年五月十三日

吉文字屋左衛門  
(木挽町中之町)

寛政十二年四月

寛政十二年六月

寛政十二年七月廿八日



舊地考 一冊

改正江戸道中記 一冊

大坂より登船獨案内 三つ切小本 一冊  
京まで

浪花近古圖 一枚摺 折本  
以前「浪花往古圖」と題せしを此度改題發行申出

唐土名勝圖會 五冊 丁數二百五十二丁

長崎紀行 一冊 丁數七十三丁

大日本名所記 二十冊  
以前「國花萬葉記」と題せしを此度改題發行申出

平天儀 一枚摺

平天儀圖解 一冊

廿四輩御舊跡圖 奥文段七丁 増補申出

日本風土記 八冊

大阪袖鏡 一冊  
再板發行申出

河内國細見小圖 全一紙  
新板發行申出

宇治五十槻  
(伊勢荒木田神主)

大村喜兵衛  
(南久寶寺町四丁目)

安藤一言  
(安堂寺町五丁目)

陸 丈右衛門

長久保赤 (水戸)

岩橋善兵衛  
(和泉貝塚南新町)

岩橋善兵衛  
(和泉貝塚南新町)

貧道

秋里仁左衛門(京都)

丹羽桃溪

鹽屋忠兵衛  
(北久太郎町五丁目)

柏原屋嘉兵衛(博勞町)

藤屋九兵衛(安堂寺町五丁目)

柏原屋佐兵衛(順慶町五丁目)  
右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行

河内屋吉兵衛  
(北久太郎町五丁目)

藤屋九兵衛  
(安堂寺町五丁目)

河内屋太助  
右板元よりの申出でを本  
屋行司にて開届け板行

河内屋八兵衛  
(北久太郎町二丁目)

河内屋八兵衛  
(北久太郎町二丁目)

河内屋太介  
右板元よりの申出でを本  
屋行司にて開届け板行

播磨屋五兵衛(長瀬心齋町)

河内屋多介  
右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行

鹽屋平助  
右板元よりの申出でを本屋  
行司にて開届け板行

寛政十二年六月廿八日

寛政十二年八月八日

寛政十二年十一月二十日

寛政十三年二月五日

享和元年七月十一日

享和元年八月十一日

享和元年八月

享和元年十一月廿四日

享和元年十一月廿四日

享和二年二月

享和二年四月十七日

享和二年七月

享和二年七月

攝河水損村々改正圖 全一紙  
素人の藏版を買受け發行願出

吉田作治郎  
(高麗橋二丁目)

鹽屋平助  
(南久寶寺町五丁目)

享和二年八月  
享和二年九月十三日

天文平天儀圖解 増補 一冊  
捷徑

岩橋善兵衛  
(和泉貝塚)

河内屋太助  
(唐物町四丁目)

享和二年九月  
享和二年十二月十日

【附記】

本書は以前北久太郎町二丁目河内屋八兵衛の藏版なりしが、此度その板木を河内屋太助方に譲り受け、丁數五丁増補し板行の義を出願したるなり。

日用辨惑書口訣と、天文平天儀圖解 とにつきて、此の兩書板行の義出願したるに「曆に差拂ひなき書物か」との質問あり、これにつき本屋行司にて相談の上、當時大阪に於て名高き曆學者麻田立達(本町四丁目住)の鑑別を乞ひその證言を得て「曆には差拂ひなきよしの口上書」を行司藤屋九兵衛、次郎右衛門の連署を以て差出し許可を得たり。

大日本國指掌全圖 一枚摺

西守貞丈(岩田町)

藤屋彌兵衛  
(高麗橋一丁目)

享和三年閏正月  
享和三年二月十日

二十四輩順拜圖會 前篇 六冊

事教寺了員  
(河州美田郡南十番村)

小刀屋六兵衛  
(津村東之町)

享保三年二月  
享和三年四月十四日

【附記】

本書は最初に六冊物として出願したるが、その許可に先立ち六の卷を除き、五冊物に改むることを出願し、許可を得たりき。

唐土名勝圖會 第一集 六冊

岡田玉山  
(南久太郎町六丁目)

河内屋吉兵衛  
(北久太郎町五丁目)

享和三年七月晦  
享和三年七月晦

播州名所巡覽圖會 五冊

(故人)秦石田

鹽屋忠兵衛  
(北久太郎町五丁目)

享和四年三月  
文化元年三月二十四日

大日本道中行程細見大全 折本一冊

島飼洞齋

吉文字屋市左衛門  
(木挽中ノ町)

文化元年三月  
文化元年五月二十四日

○石川成章氏還曆紀念寄附

茲に還曆に達せられた石川成章氏の祝賀紀念事業は其の後多數の贊同者があつて終了したが、之と同時に石川氏は還曆紀念の爲め地球學園の事業費中へ金百圓を寄附された。地球學園は其の御好意を喜んで受納し、時期を見て「地球」に挿入する圖版などに其の使途を見出し一般と共に同氏の芳志を享受するつもりである。